令和７年度小松市立粟津小学校　学校評価　１（年度末）

めざす児童生徒像

学びに主体的（一生懸命）に関わり合う児童

※児童生徒結果－教員結果・保護者結果

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	中間 数値・アンケート結果（%） 教員	中間 児童生徒	中間 保護者	中間 ※差	年度末 数値・アンケート結果（%） 教員	年度末 児童生徒	年度末 保護者	年度末 ※差	達成状況の分析	改善策
学校重点項目（学校で設定）	理念の実践		**①の値を90%以上にする。**	① 学びに主体的に関わり合う児童の育成に努めている。	100 A:76 B:24	91 A:64 B:27	97 A:61 B:36	−9	100 A:67 B:33	92 A:56 B:36	98 A:57 B:41	−8	いずれも肯定的な回答が１００％であった。教師、児童、保護者いずれもAの積極的で肯定的な回答が少し減ってきたのが気にかかる。	教師間でどんな姿が「学びに主体的な姿」なのかを共有、確認する。また、その姿を子ども達に伝え日々の授業で目指す。
				② 危機管理意識を高め、安心安全な学級づくりに努めている。	100 A:84 B:16				100 A:67 B:33					
				集計										

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目									達成状況の分析	改善策
石川県共通重点項目	働き方や業務の改善		**③の値を90%以上にする。**	① 80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	100 A:23 B:77				100 A:76 B:24				③の肯定的な値は１００％となったが、Aの積極的で肯定的な回答が減ったのが気にかかる。また、②の肯定的な回答が減ったことも気にかかる。	教材研究・研修の時間を確保するための時間の確保の捻出をこれからも探っていきたい。また、創意工夫の取組の具体例を共有していきたい。
				② 学校組織の中で自分の役割が明確であり、創意工夫しながら取り組むことができている。	100 A:46 B:54				92 A:25 B:67					
				③ 組織として教材研究・研修の時間を確保している。	91 A:61 B:30				100 A:25 B:75					

	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	中間 数値・アンケート結果（%） 教員	中間 児童生徒	中間 保護者	中間 ※差	年度末 数値・アンケート結果（%） 教員	年度末 児童生徒	年度末 保護者	年度末 ※差	達成状況の分析	改善策
小松市共通重点項目	指導力の向上	学校研究	**③の値を90%以上にする。**	① 研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、単元（授業）構想シートなどの具体的な取組を共通実践している。	91 A:53 B:38				91 A:33 B:58				③前回は肯定的評価が100%であったのに対し、今回は92%にとどまり、授業構想シートの活用が全教員において確実な実践として定着しているとは言い難い状況が明らかとなった。特に、A評価の割合が46%から25%へと大幅に減少していることから、早期に実践を行った教員を中心に、実践の質や継続性に対する課題意識が高まり、B評価へと移行したと考えられる。	③授業整理会等の場において、授業構想シートと実際の授業との関係を具体的に振り返る時間を意図的に確保する。単なる記入に終わらせるのではなく、構想した内容が授業のどの場面にどのように反映されたのかを共有・検討することで、授業構想シートの活用の質を高めていく。
				② 授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を語ったり、改善案を示したりするなど主体的に取り組んでいる。	91 A:53 B:38				91 A:58 B:33					
				③ 授業改善への共通した取組（授業構想シートの活用）を確実に実践している。	100 A:46 B:54				92 A:25 B:67					
				集計										
		「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善	**②の児童の割合が 中間…70%以上 年度末…80%以上**	① 児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	100 A:7 B:93	92 A:60 B:32	小松市 教員９３% 児童８９%	−8	100 A:17 B:83	90 A:53 B:37		−10	②肯定的評価は教員92%、児童87%と高く、話し合い活動が授業に定着していることがうかがえる。一方で、児童の肯定的評価は前回よりやや低下しており、話し合いを通した学びの深まりを十分に実感できていない児童もいると考えられる。また、A評価の割合には教員と児童で差が見られる。	②話し合いによる学びの深まりを支える教師の声掛けを共通の視点として明確にし、授業の中で意図的に活用していく。また、話し合いの中で見られた思考の深まりや広がりを教師が言葉にして価値づけることで、児童の気づきを促す。さらに、授業交流や授業整理会を通して、その声掛けや価値づけが児童の学びにつながっているかを具体的な授業場面をもとに確かめ合い、話し合い活動の質の向上を図る。
				② 児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができている。	91 A:15 B:76	91 A:69 B:22	小松市 教員９０% 児童８９%	0	92 A:17 B:75	87 A:55 B:32		−5		
				③ 児童生徒は、自分の考えを発表する機会では，自分の考えがうまく伝わるよう，資料や文章，話の組み立てなどを工夫して発表している。	76 A:0 B:76	88 A:50 B:38	小松市 教員７８% 児童８５%	12	66 A:8 B:58	87 A:48 B:39		21		
				④ 児童生徒は、話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達の考え（自分と同じところや違うところ）を受け止めて自分の考えを伝えている。	67 A:7 B:61	88 A:56 B:32	小松市 教員８３% 児童８８%	21	84 A:17 B:67	85 A:51 B:34		1		
				⑤ 児童生徒は、振り返る活動の中で、授業の目標に沿って自分の学びの変容を実感したり，学びに対する達成感を得られたりしている。	100 A:15 B:85	87 A:58 B:29	小松市 教員８９% 児童８８%	−13	100 A:17 B:83	88 A:58 B:30		−12		
				⑥ 児童生徒は、コンピュータなどのICT機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために使用している。	84 A:23 B:61	95 A:70 B:25	小松市 教員７８% 児童９１%	11	84 A:42 B:42	92 A:71 B:21		8		
				⑦ 子供が自ら学びに向かうような授業づくりに取り組んでいる。	100 A:38 B:62				100 A:33 B:67					
				集計										
	学力の向上	カリキュラム・マネジメント	**③の割合が 中間…85%以上 年度末…90%以上**	① 指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断的な視点で組み立てている。	100 A:46 B:54				91 A:33 B:58				①②肯定的評価が下がり、指導計画を教科横断的な視点で組み立てることや教育課程の編成が難しいと考えられる。また、Aの割合も少ないままである。 ③Aの割合が下がった。学年によって取り組みに偏りがあり、目的、方法、意義を全職員で共通理解することが難しかったと考えられる。	①②２学期分を再考し、カリキュラムマップや管理運営計画の見直しをするときに、来年度に引き継ぐことができるように書き込んでいく。 ③取り組み内容を、職員にお知らせして確実に取り組んでいく。また。追試したミニプリントの結果や授業作りについて終礼等で報告していく。
				② 児童生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のＰＤＣＡサイクルを確立している。	100 A:23 B:77				92 A:17 B:75					
				③ 全職員が学力向上の取組の目的や意義を理解し、課題の解決を期待できると納得して共通実践に取り組んでいる。	100 A:38 B:62				100 A:17 B:83					
				④ 校区の小・中学校間で学力について情報交換し、課題について共有している。（小中連携）	92 A:23 B:69				84 A:17 B:67					
				⑤ 学力調査の分析を生かして帯タイム学習等の充実を図る。	91 A:30 B:61				92 A:42 B:50					
				集計										
		学習方法	**③の値を80%以上にする。**	① 児童生徒が自分で学ぶ内容や学び方を決めるなど、工夫して取り組めるような活動を行っている。	91 A:30 B:61	84 A:39 B:45	小松市 教員８８% 児童８７%	−7	100 A:17 B:83	75 A:39 B:36		−25	①教員は上がったが、児童は９％下がっている。学年によっては、３分の１の児童が自分で学び方を考え工夫することを難しいと感じている。 ①②児童と教員の差が大きい。 ③クロムブックに移行し、使い慣れない中、もっと質のよい宿題を出したいと考えたためか、教員の肯定的解答が下がっている。	①②学年に応じた指導を継続していく。学び方の選択肢を低学年は経験することを大切に、高学年は選ぶ機会を増やすことを意識して授業作りを進める。また、できたことを実感させる指導も必要である。 ③Qubena等ドリルではない端末を使った家庭学習の実例を教員で交流していく。持ち帰る頻度を増やしながら、家庭でより使えるようにしていく。
				② 児童生徒が自分の特性や理解度・進度に合わせて課題に取り組む場面では、児童生徒一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器を活用している。	91 A:61 B:30	86 A:65 B:20	小松市 教員８５% 児童８５%	−5	100 A:42 B:58	87 A:60 B:27		−13		
				③ 家庭学習で学習用端末を自分で使えている。	91 A:53 B:38	90 A:78 B:12	89 A:44 B:45	−1	84 A:42 B:42	90 A:68 B:22	92 A:41 B:51	6		
				集計										